

2021年1月3日 司祭 越山 哲也

八戸聖ルカ教会

## 降誕後第2主日 説教

「ヨセフが見た夢とは」

〔旧約聖書〕 エミヤ書 31:7~14

〔使徒書〕 エフェソの信徒への手紙 1:3~6、15~19

〔福音書〕 マタイによる福音書 2:13~15、19~23

主の平和が皆さんと共にありますように。

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしく願いいたします。

八戸聖ルカ教会は今年宣教125年目に入りました。コロナ禍が続いていますが神の宣教は止まることなく今日のこの瞬間も神の国に完成まで働き続けていることを私たちは年始にあたり改めて心に留め、今年1年も神さまの宣教の業にそれぞれが与えられた賜物を生かしながら参与していきましょう。

昨年はコロナ対策で集まるのが難しい1年でしたが今年は少しでも集まる機会が増えますように願っています。皆さまの健康が守られますようにお祈りいたします。

さて、クリスマスの季節も今週の6日の顕現日をもって終わりになります。クリスマスの飾りを片付けるのは個人的には少々寂しい気持ちがあります。

今日は、降誕節最後の主日である降誕後第2主日を迎えました。み言葉に聴きましょう。

主イエス様のご降誕の出来事の後に何が起きたか、マタイによる福音書は語ります。

主の天使が夢でヨセフに現れて

「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出そうとしている。」(マタイ2:13)

ヘロデ王は己の権威が脅かされるのを恐れて2歳以下の男の子を虐殺する命令を下しました。あまりにも惨いことです。イエス様の誕生の喜びの背後にこの悲しみがあることを私たちは忘れてはなりません。そして、イエス様家族はエジプトに逃避行することになるのです。

赤ちゃんの誕生という嬉しい出来事の余韻に浸っている場合ではなかったのです。

ヨセフはまだマリアとまだ赤子であったイエス様を守りながら、不安な旅をしなければならなかったのです。聖家族の姿はこれが聖書が語る事実です。

ヘロデが死んだ後は、彼らはヘロデの息子アルケラオが支配していることを聞き、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだのです。

これよりイエス様は「ナザレの人」と呼ばれるようになったのです。

「ガリラヤ地方に引きこもり」とあることからヨセフは時の権力に不安を感じていたのかもしれませんが、ヨセフがその後どのような生涯を過ごしたかは聖書には記されていません。しかし、確実に言えることはヨセフの覚悟がイエスの誕生からその後の幼少期にはあったということです。

マリアは思いめぐらしながら己の運命を受け入れていったのであれば、ヨセフは不安な気持ちを抱えながらその都度覚悟を決めていったのかもしれませんが。

その覚悟を支えていたのは、神への信仰に他なりません。聖書ではどうも神様は夢の中でお告げをするようです。主の天使も夢の中で現れました。夢というのは目が覚めたら忘れるものでしょうか。

ここでいう夢とははっきりとした確固たる神様からのメッセージだと思います。

キング牧師が「私には夢がある」と言った有名な言葉があります。あの言葉は多くの人種差別を受けていた人々に希望を与えました。そうです。夢とは希望なのです。ヨセフは夢の中で与えられたおつげを生きる糧、生きる希望としていったのではないかと思います。

元旦に見る夢を初夢といいます。皆さんは何か夢をみましたか？私は残念ながらみませんでした。

でも今日与えられた福音で今年最初の夢をみました。神さまから希望が与えられました。不安なことが多い日々ですが、主がそうであったように私たちも神様から与えられている夢、希望を糧に今年1年間歩んで参りたいと思います。

父と子と聖霊に栄光がありますように。アーメン